

地域経済ウォッチング

いわき民報 2010年5月27日(木曜日)

いわきを歩く

—人間の歴史が各所に存在—

東日本国際大学経済情報学部准教授

山田 紀浩

今年の春先の天気は例年になく不安定であったが、5月の中頃から、ようやくその時期らしさの天候を取り戻して来たようである。そこで週末にせっかくの良い天気なので、市内の公園にウォーキングに出かけた。土曜日は“勿来の関公園”、日曜日には“いわき公園”に行ってきた。計ったわけではないが、どちらも50分程度歩いた。

いわき公園は、広大で管理もしっかり行き届いており、自然が残る素晴らしい公園である。利用者はおそらくほとんどがいわき在住の市民であろう。家族単位が主であるようだが、新婚夫婦、老夫婦、子連れ、あるいはアベック達が、それぞれの休日の一時を過ごしていた。ウォーキングコースの流れに乗り少々せわしく汗をかく人がいれば、ペットとの散歩、あるいはベンチで休み休み歩く人など様々である。

勿来の関公園は、広大ではあるが、いわき公園とは違った様相だ。ここではゆっくり歩く人が多い。そして立ち止まらされる。ここには和歌の石碑がいくつもあからである。それぞれの歌を詠みながら、古の歌人の想いに触れる。文化とは好いものだと再確認させられる。ここはいわき公園ほど人が多くなかったが、訪れる人は服装からも見ても観光客がほとんどであったようだ。「これは勿来(なこそ)とは読めないね」と和歌を詠みながら感心していたようだった。

たまたま 2 つの公園を歩いたのだが、この他にもオーシャンビューのサンマリーナや三崎公園を初めいわきには素晴らしい公園がある。しかし山あり海ありと自然豊かないわきの地であるが、そればかりではない。いわきには常磐炭鉱という、かつての日本の産業社会の屋台骨として君臨したたくましい歴史がある。それは現在、炭鉱遺跡を回るヘリテージツーリズムのコースで巡ることができるが、廃墟跡からいわきの力強さを見ることができる。そして当時の産業構造の中で必死に働いた先輩方の気概を垣間見られる。やはり地域というものには、人間の歴史がある。現在のいわきもいわき人が歩んだ歴史の結晶として存在する。そして現代、産業構造は変わったが、制度を初めとし我々の歩みが次の時代へと引き継がれることは間違いない。

ところで最近、星一に関する記事が地方紙の紙面を賑わしたことは記憶に新しい。ドイツ政府が星一の功績を讃え顕彰碑を寄贈したが、その除幕式が 4 月 24 日勿来市民会館前にて執り行われた。しかし星一の銅像は勿来市民会館前の片隅にずいぶん前から置かれていた。実はここは小生の小学校の通学路であったために、6 年間その前を通っていた。その銅像主は 2 文字で姓名を名乗っているのに逆に印象深く小学生にも覚えやすかったが、どんな人かとは思っていた。やがて中学校で星新一を読み、その銅像の人が彼の父であることを知ったが、星製薬株式会社、星薬科大学の創設者である以外よくわからなかった。それよりも偉大な SF 作家である星新一の父のイメージが強くなっていた。5、6 年程前に猪苗代の野口英生記念館に行った時に、英世と一のツーショットの写真があった。アメリカ留学時代から二人は親友であり、同郷の一は英世を援助したと記されていた。恥ずかしながら、いわきの郷土の偉人を会津で教えてもらった訳だが、今回はドイツ人に郷土の偉人を再認識させられた。一は日本の医学界に貢献が深いドイツの第一次大戦後の惨状を見て、私産を投じて援助していたという。一の社会奉仕精神は、彼の人生哲学である「親切第一」にあるようだ。これは長男の本名である“親一”に込められている。そして彼の人生哲学は、郷土の祖父母そして父母から受けついたものに違いない。

いわきは近場を歩いただけで豊かな自然そして力強い産業遺産に触れることができる。しかしそれらもそれを表現する人間がいないと、それらの価値は見出せない。文化、教養は人間を豊かにし、地域を豊かにしていく原動力ではなかろうか。この春、いわきでは星一が少々話題になったが、これをそのまま終息させたくはないものだ。郷土の偉人の銅像をしてみるのも一考ではなかろうか。

いわきを歩く。まだまだ奥が深そうだ。